

令和3年度 全国農業大学校等意見発表会 発表者及び発表課題名一覧

[2月2日]

発表順	ブロック名	農業大学校名	発表者氏名	発表課題名	発表時間
1	関東	埼玉県農業大学校	寺田 篤哉	ミソバチと新規就農～SDGsの理念～	14:00～
2	東海・近畿	愛知県立農業大学校	小池 創太	都市型酪農で生きていく決意	14:13～
3	中国・四国	島根県立農林大学校	星野 航	農林大学校での学び	14:26～
4	九州	鹿児島県立農業大学校	宮下 未来	命ある牛たちへ ～“宮下姫牛”のブランド化へ向けて～	14:39～
5	東日本	山形県立農林大学校	佐藤 陽菜	雪ノ下野菜を鳥海町のブランドに ～冬の厄介者を味方にして～	14:52～
6	関東	新潟県農業大学校	曽我 実子	私の父は農業が嫌い	15:15～
7	東海・近畿	兵庫県立農業大学校	前岡 あんり	丹波篠山の担い手になるために	15:28～
8	中国・四国	愛媛県立農業大学校	松下 彩香	夢	15:41～
9	九州	熊本県立農業大学校	後藤 仁嘉	畜産で阿蘇を活力ある地域へ	15:54～
10	東日本	青森県営農大学校	菅 道	生産者の経済性追求	16:07～

注) 発表時間は予定ですので、通信環境の不具合が生じた場合は遅れることがあります。

令和3年度全国農業大学校等意見発表要旨

農業大学校名 埼玉県農業大学校 学科名等 花植木学科花き専攻 学年 2 年 氏名 寺田 篤哉^{てらだ あつや}

1 課 題

ミツバチと新規就農～SDG s の理念～

2 意見・提言

(1)私の半生

私は今年 31 歳。さいたま市出身で、山梨県の高校・大学に越境入学し、箱根駅伝を目指していた。しかし、膝の怪我で悩んでいた時に、「蜂針療法」という民間療法に出会いミツバチの世界にのめり込んだ。大学卒業後、福島県の養蜂場に就職し、その後、青年海外協力隊として養蜂の技術指導のためモザンビークへ赴任。帰国後、マラリアが発症し一時危篤状態だったが回復し、新規就農を目標に、埼玉県農業大学校に入学した。

(2)卒業後、越生町でウメと養蜂で新規就農

新規就農先は、埼玉県のウメの生産量 1 位の越生町のウメ農家の方を紹介してもらった。ウメの受粉にはミツバチが必要。地域にいち早く馴染むため梅農家になり、養蜂とウメ栽培で地域に根ざす複合農業を目指している。越生町では、SDG s による地域の振興に町を上げて取り組んでおり、環境に配慮したウメの生産量上げる手段として、ミツバチの受粉が期待出来る。

(3)埼玉県農業大学校での取組

チャレンジファームという疑似農業経営体験を実践し、生産から販売まで学生個人が行い、今年度、ミツバチを飼育し約 35 kg の蜂蜜を採り、学校の販売会等でほぼ完売した。

卒業論文のテーマは、ウメ栽培と養蜂の経営計画表を照らし合わせ、効率的に所得を上げるため、栽培品種や作業時間の割合などを考え、参入後の農業経営をシミュレーションしている。

(4)自分の経営理念

SDG s の考え方を取り入れた農業というものが、これから主流になってくる。SDG s とは 2030 年までに達成すべき、国際社会共通の持続可能な開発目標のことで、17 の目標と 169 のターゲットで構成される。

「誰一人取り残さない」という基本理念がある。

(5)「誰一人取り残さない」

学生の一部は夢を持って大学校に入ったが、農業の現実を知り、農業をあきらめかけ、不安になっている。そんな彼らを取り残さないようにするのが、自分の使命だと考えている。

農業を夢ある仕事として、彼らを勇気づけられる存在として、卒業後も彼らと共に歩んでいきたい。越生町で養蜂とウメで新規就農をして埼玉県の農業を盛り上げたい。

令和3年度全国農業大学校等意見発表要旨

こいけ そうた

農業大学校名 愛知県立農業大学校 学科名 農学科 酪農 1年 氏名 小池 創太

1 課 題

都市型酪農で生きていく決意

2 意見・提言

(1) 酪農家になる～「臭い」という課題～

私の父は酪農家だ。幼少より、牛乳という食糧を生産する家族の仕事に私は誇りを持ち、父の牧場を継ぎたいと思ってきた。中学生となり、本格的に仕事を手伝うようになったが、この頃、「牧場の臭い」について指摘されることに疑問を抱くようになった。牧場の周囲は急速な市街化が進み、同級生から牛舎の臭いに対して、「臭い」「引っ越してくれ」と言われ傷ついた。臭いが拡散しないよう堆肥の切り返しの時間を選ぶなど、地域との共存を模索している父の取り組みや、気づかいが理解されていないことが悲しくなった。

(2) 臭い対策を学ぶために

農大に進学し、臭い対策について勉強しようと派遣実習先を探した。小池牧場にやってくる削蹄師に相談したところ、「真似したい牧場の取組を酪農家の目で見ろ」と助言をもらい、東海三県の牧場を案内してもらった。見て回る中で多くのことを質問し学ぶことが出来たが、もっといろんな臭い対策について知りたいと思った。茨城県石岡市にある石岡鈴木牧場が掲げる、美味しいヨーグルト&チーズは「土から」のキャッチコピーが目にとまり、派遣実習を申し込んだ。

(3) 土づくりはお客さんの笑顔につながる

石岡鈴木牧場では、牛舎の臭いが気にならない。牛の糞と木のチップを混ぜ合わせて堆肥を作り、その堆肥を畑に散布し土を健康にすることで草が健康に育つ。それを牛が食べて健康になり健康な糞をだす。これを繰り返すのだ。チーズとヨーグルト作りにも取り組み、販売もしている。その製品の販売会で印象的だったのは、4歳と6歳の姉妹の感想だった。「給食に出る牛乳とは違う」「飲みやすくて美味しい」、彼女たちの笑顔を見て、私もお客さんに喜んでもらえるような酪農に取り組みたいと思った。そのために、牛ふん尿から良好な堆肥を作り、圃場に散布し土作りをすることが重要だと学んだ。

(4) 私が目指すべき酪農家への道筋

まずはしっかりと堆肥づくりに取り組み、おいしい牛乳と乳製品を提供できる牧場を作りたい。市街化が進むのを心配していたが、酪農の魅力を伝える人が周囲に住んでいると思えば、ピンチはチャンスに変わるはずだ。地域のみなさんとの交流を通じ酪農という仕事の魅力を伝え、酪農に理解ある仲間を増やしたい。美味しい乳製品を生産・供給し、地域から応援され、愛される酪農経営。これが、私が描き、目指す都市型酪農だ。

→

令和3年度中国ブロック農林大学校等意見発表要旨

農林大学校名 島根県立農林大学校 学科名 林業科 学年 1年 氏名 星野^{はしの}航^{わたる}

1 課 題

農林大学校での学び

2 意見・提言

(1) 入学動機

入学のきっかけはUターンでした。私は農林大学校へ入学する前は県外の民間企業で働いていました。しかし、新型コロナウイルスが蔓延した影響で実家への帰省ができなくなったことをきっかけに、今住んでいる場所では何かあったときに遠いと感じ、島根にUターンすることを決めました。Uターンと同時にすぐに転職するかどうか考えた際、退職のタイミングで時間を作り、もともと興味があった林業をじっくり勉強したいと思いました。そこで、実習が充実していて実家にも近い、島根県立農林大学校への進学を決めました。私の実家には祖父が植えた人工林が小面積あります。祖父が亡くなってからは手入れができていなかったため、祖父が残してくれた森林を自分で管理できるようになりたいと以前から思っていました。私自身は何事も反復練習をしないと習得できないタイプです。林業以外の仕事をしながら講習へ参加するのは予定を合わせるのが難しいでしょうし、林業事業体に就職しても日中に機械操作の練習時間を確保することは難しいだろうと考えたため、学校での勉強を選びました。また、安全を最優先する学校のやり方を知ってから事業体のやり方を知れることも進学のメリットだと考えていました。

(2) 大学校での学習で意識していること

農林大学校に入学して半年が経ちました。今思うのは、「やはり農林大学校で学ぶことにしてよかった」ということです。大学では学べなかった技術的なことを、日々の反復練習を通して自分のものにできている実感があります。また、社会人を経験してから入学したことで、勉強に集中できることのありがたみを感じながら授業に参加できます。私自身は作業道の計画・作成から造林・伐採まですべての基礎を着実に身に付けたいと考えています。そんな中で、放課後や夏休みなどは、職員の方々にマンツーマンに近い形で指導していただける貴重な時間です。実習で上手にできなかったことの反復練習はもちろんのこと、実習内容の応用や予習にあたることもさせていただけるチャンスなので、積極的に参加しています。学生の「やりたい」という気持ちを尊重して様々な経験をさせてくださる林業科に、日々感謝しています。

(3) 将来の目標

私自身は学校を卒業したら事業体に就職し、将来的には森林施業プランナーとして働きたいです。地形や土壌、また森林所有者の意向に沿って、災害を起こしにくい作業道を計画し、100年先に感謝される森林を提案したいと考えています。あわせて、自分でも山を購入して管理をしていきたいと考えています。

不安要素の一つとして、採算を合わせられるのかという点があります。現在はウッドショックの影響で一部の木材価格が上昇していますが、木材の国際価格全体が大きく変わることがなければ、次第に元の価格に戻っていくはずですが、A材を生産する森林ばかりでなく、B・C・D材を生産することを想定した林分や特用林産物の生産と並行させる林分、森林セラピーやハイキングに利用する林分など、さまざまな林分を提案できる人材になりたいと思います。そのためには、大学校の授業で学ぶことだけでは不十分です。他の国では、森林の施業計画を監督する立場になるための資格試験が医師になるための試験よりも難しいと言われます。現場はもちろんのこと、座学でも学ぶべきことは尽きません。学校を卒業するまで、そして卒業後についても、自分自身で勉強を進め、貪欲に学んでいきたいです。

令和3年度全国農業大学校等意見発表要旨

農業大学校名：鹿児島県立農業大学校

学科名：肉用牛

学年：1年

氏名：宮下 未来

1. 課 題

命ある牛たちへ ～ “宮下姫牛” のブランド化へ向けて～

2. 意見・提言

(1) 牛との関わり

我が家は、400頭規模の肉用牛一貫経営農家です。

父は、毎日の牛の世話で忙しくしている中で、「“宮下姫牛”として多くの人に食べてもらいたい」という夢を私たち姉弟に話してくれました。小学4年生の時、大好きだった母を亡くし、家事は幼い姉弟で分担してきました。慣れない家事に追われる毎日がとても辛かったとき、その寂しさを紛らわしてくれたのは我が家の牛たちでした。しかし、私は成長するにつれ、出荷後の牛は『食用肉』になるのだと知ることになりました。牛の運命を思うと居ても立ってもいられなくなるため、「牛は私たちが生活するためだけの存在なんだ」と、牛に対する割り切った感情を持つようになりました。

(2) 目覚め (第1章)

高校では、牛の飼育に特化した畜産部に入部しましたが、『命』と真剣に向き合う牛の管理に体力が伴わず、卒業まで続けられるか不安でした。いつもと変わらないある日、きれいな水を飲み、1頭ずつのんびりと過ごす牛たちを漫然と眺めているとき、訳もなく突然に忘れていた牛への愛情が沸き起こり、失っていた感情が色付いていくようにさえ思えました。その後は、部活動もやり甲斐を感じ、楽しくなっていました。知識はもとより『命を慈しむ愛情』を管理に繋げることの重要性を実感しました。私たちの食糧になってくれる牛たちに命がある限りは、飼育管理者には快適に過ごさせる責任があると思っています。

(3) 農業大学校にて (第2章)

農業大学校で、牛飼ひ人生の第2章がスタートしました。農業大学校では、肥育班長として、生まれたての子牛から体重900kgの巨大な牛と向き合っています。私は牛と会話ができるくらい観察を徹底して、物言わぬ牛たちの微妙な変化に気づいてあげられることを目指しています。そして、農大での私の最終的な目標としては、将来、牛のことをはじめ、何でも相談できる仲間づくりと経営的な感覚を身につけることです。

もう既に父の夢は私の目標となり、実現に向かって動き出しています。今後の経営は私たち姉弟が主体となっていきますが、美味しい肉づくりと命に感謝する経営を実践していきます。特に我が家の名物にしたい雌牛は、繊細なうまみを求める関西や関東への販売戦力の一環として、“宮下姫牛”のブランド化を考えています。

(4) 命への感謝

私たちの健康は、多くの尊い命によって支えられています。少しでも多くの人が、食肉料理を前に、「いただきます」「ごちそうさま」と手を合わせることができれば、牛たちの存在意義や価値が高まり、そして畜産農家の幸福度も確実に上がってくると信じています。

令和3年度全国農業大学校等意見発表要旨

農業大学校名 山形県立農林大学校 学科名 野菜経営学科 1年 氏名 佐藤 陽菜

1 課題

雪ノ下野菜を鳥海町のブランドに ～冬の厄介者を味方にして～

2 意見・提言

<背景>

私の地元は秋田県由利本荘市の鳥海山の麓に位置する鳥海町というところで、冬には2メートル以上の雪が積もる豪雪地域である。私の祖父母は稲作の転作作物として約1.2haのアスパラガスの栽培をしているが、一年を通して安定した収入が得られないということが、我が家の経営面での課題となっている。そこで、冬の気候を生かした雪ノ下野菜に着目した。

<卒業研究>

山形県立農林大学校でにんじんを用いた雪ノ下野菜をテーマに、最適な貯蔵方法と販売可能期間、販売方法等を検討する卒業研究に取り組んでいる。

<雪ノ下野菜の課題>

雪ノ下野菜を生産する農家への聞き取り調査の結果、課題は、認知度の向上、販路の確保、生産量の拡大の3点にあるということがわかった。現在出荷されている雪ノ下野菜のほとんどが関東の市場に出荷されているが、量が少なく、輸送コストもかさみ、量的にも價格的にも勝負できない状況にある。

<販売戦略>

販売ターゲットを地域住民とし、地元のスーパーや産直限定販売にしたいと考えている。地元の人に、雪ノ下野菜という存在やおいしさを知ってもらい、需要拡大を図る。需要が拡大すれば、雪ノ下野菜に取り組む農家が増えることも期待される。また、観光客にアピールし、名物として認知度が上がっていくという効果も考えられる。

<卒業後のビジョン>

一つ目、山形県立農林大学校での卒業研究で雪ノ下野菜の魅力について自信をもって紹介できるような成果を出し、雪ノ下野菜を鳥海町のブランドに高めたい。

二つ目、雪ノ下野菜を地元の小中学校の給食に提供するなど、子供たちに冬でも美味しい地元産の野菜の良さを実感してもらい、農業への関心を少しでも高めたい。

山形県立農林大学校で学んだ後は、鳥海町に戻って就農し、豪雪地帯であるからこそできる雪ノ下野菜を広め、たくさんの仲間とともに地域を盛り上げていきたいと思っている。おいしいアスパラガスづくりと周年農業の確立、それが私の夢である。

令和3年度全国農業大学校等意見発表要旨

農業大学校名 新潟県農業大学校 学科名 園芸経営科野菜専攻 2 学年 氏名 そが えみこ 曾我 笑子

1 課 題 私の父は農業が嫌い

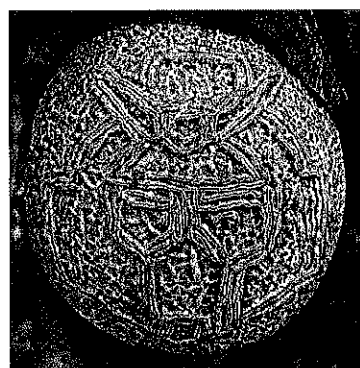
2 意見・提言

(1) 私の父は農業が嫌い

私は農業が大好きだ。私とは逆に実家が農家だった父は農業が嫌いで、高校卒業後は家を出て何年か東京で働いた。ある日、学校で教わった農業の話を熱く話した後、父から言われた言葉に涙した。私は父に“農業はそんなに悪いものじゃない。私がどれだけ農業をしたいと思っているかわかってもらうしかない”と考えた。

(2) 私なりの伝え方

農業の面白さを父に伝えるために毎日農業記録賞や農大祭の展示などで様々なことをした。中でも立ち栽培のメロンが肥大するときに刻んだ父の好きなガンダムの絵には喜んでくれた。それから父と農業の話をすることが楽しくなった。私は「メロンを作っている農家に就職をしたい」と伝えた時、「自分の好きにきなさい」と優しく言ってくれた。父に私の想いが伝わったと思う。



ぶさいくなガンダムメロン

(3) 将来やりたいこと

ア 夢の第一歩がスタートできるわくわく感

メロンやスイカ、ねぎなどを多く栽培している農業法人に入社できる。私の大好きなメロンの立ち栽培も行っている。ここで多くの栽培技術や経営戦略を学びながら、私の作ったメロンの表情を通して、多くの人に農業の面白さを伝えていきたい。

イ 農業を実際に見てもらう

父に農業の面白さを伝えられたように多くの人にも伝えたいと思うようになった。そこで私が考えたのは立ち栽培のメロンの観光農園だ。私の就職先では、広大な砂丘地に先が見えないほどにメロンやスイカを栽培している。その光景を観光農園に訪れる人達から見てもらうことで非日常的な気持ちを体感できると思う。

ウ 体験型観光農園でオリジナルメロン

メロンの収穫体験はもちろんのこと、父のためにメロンに絵を描いたように、お客さんにも“大切な誰かのために”、“自分へのご褒美のために”好きな絵や文字を描いて自分だけのオリジナルメロンを作るイベント等の企画の提案をしたい。

(4) 私の目指す農業者

私が作ったメロンの表情を通して農業の面白さを伝えていきたい。そのために、作るだけでなく、アイデアを積極的に提案していこうと考えている。そして、いつか父に「私、もうプロだよ。私の作ったメロンが多くの人を笑顔にしているよ。」と胸を張って言えるようなカッコいい農業者になって恩返しをしたい。

東海近畿ブロック農業大学校学生意見発表要旨

農業大学校名 兵庫県立農業大学校 学科名 農産園芸課程作物専攻 学年 1 年 氏名 まえおか 前 岡 あんり

1 課 題 丹波篠山の担い手になるために

2 意見・提言

(1) 私が農業に興味を持ったきっかけ

祖父母が丹精込めて育てたトマトの収穫を手伝って、真っ赤に熟れたトマトを一口食べたとき、どのトマトよりも美味しく、とても幸せな気持ちになったことを今でも鮮明に覚えています。それから農作業が徐々に楽しくなり、もっともっと農業について勉強がしたいと考え、より深く農業の勉強ができる兵庫県立篠山産業高等学校の農と食科への進学を決めました。

(2) 丹波黒大豆への想い

高校では、多くの篠山市の特産物について学びました。中でも、篠山産の丹波黒大豆は全国的にも知名度があり、生産地である丹波篠山市も全国的にも有名であるとずっと思っていました。しかし、ふるさと納税の返礼品として市が出していた丹波黒大豆に対して、「なぜ地元のものを返礼品にしないのか」との問い合わせがあったという話を聞き、はじめは言っている意味が分かりませんでした。私の中では「丹波黒大豆＝私の故郷丹波篠山市」でしたが、問い合わせた人は「丹波黒大豆＝隣町の丹波市か京都の丹波」という認識だということを知り、すごくショックを受けたことを覚えています。この話を聞いてから、私は農業についてより一層真剣に考えるようになりました。

(3) 農家になる決意

高校3年生になり、丹波黒大豆の栽培を担当することになり、正確な苗の植付、真夏の中耕培土、倒伏防止の支柱誘引など農作業の大変さを実感しました。また、全国でも珍しい枝付きの枝豆は、出荷調整にとっても手間がかかります。現在、こんな大変な農作業を担っているのは、高齢のおじいちゃんおばあちゃんばかりです。もっと若い人たちが農業に関心を持ち参加できないか、について真剣に考えた結果、「まず、私が地元で農業をして、そして農業の理解者を増やしていこう」と思いました。

(4) 農業のやりがいを発見！

高校卒業後、兵庫県立農業大学校で作物専攻に入りました。授業・実習を通して、丹波黒大豆の栽培作業の機械化、お米やサツマイモ・小豆など他の特産品に関する知識を増やすことができました。中でも、一番印象に残っているのは農家等派遣実習です。私は地元丹波篠山市の水稲等の大規模農家である「丹波たぶち農場」で毎日丹波黒大豆の枝豆の管理作業や枝豆狩りの接客を行いました。来てくださったお客様から「楽しかった」「また来年会おうね」と言って頂きました。私は、この時初めて、お客様に喜んで頂けるように地道にコツコツ汗を流して作ったものを、最後はお客様が笑顔で買って帰られる姿を目の当たりにできることが、農業のやりがいであると感じました。

(5) 私の理想の農業を実現するために

大学卒業後は、地元を支えている丹波たぶち農場さんのような先進農家で研修を受け、将来は私の生まれ育った丹波篠山市で、丹波黒大豆の栽培を行うつもりです。また、農業の理解者を増やしていくために、京阪神から1時間という立地条件を生かし、観光農園や貸農園、農家民宿にも取り組んでいきたいです。今後、全国の方が「丹波黒大豆」と聞いたら「丹波篠山市」と言ってもらえるように活動を重ね、知名度向上と農業を盛り上げ、PRしていける丹波篠山市の担い手農家を目指します。

農業大学校名 愛媛県立農業大学校 学科名 総合農学科 1 年 氏名 まつした さやか
松 下 彩 香

1 課 題 「夢」

2 意見・提言

(1) 畜産に出会ったきっかけと高校時代の経験

中学1年生の頃に出会った一冊の漫画、「銀の匙」に強く影響された私は農業高校に進学することを決意する。初めて触れる農業及び畜産の経験を通して、私は“畜産のスペシャリスト”になるという夢を抱く。

(2) 農業大学校で学びたいこと

● 肉牛・酪農分野

高校では豚と鶏しか飼育しておらず、この分野に関しては座学で基本的なことしか学ばなかったため、農林水産研究所畜産研究センター（愛媛農大分校）で行われる課業や、消費者との交流を図る畜産参観デーを通して、新しい自分の可能性を試したい。

● 養豚分野

高校で特に力を入れて学んできたのが養豚の分野である。これまでの実習や座学で培ってきた経験を踏まえて、さらにもう一つ上の段階へステップアップしていきたい。

畜産研究センターでは愛媛県のブランド豚「甘とろ豚」を飼育しているなど、高校の畜舎とは比べ物にならない規模の豚舎にはとても刺激を受けた。また、家畜衛生やふん尿処理など、専門的な講義を通して身に付けた知識を実践に結び付けていきたい。

● スマート農業

日本ではまだまだ昔ながらの手話が肯定されがちで、畜産業においてもそれは例外ではない。最近では牛の臍音センサーなどのロボットAIが活用されはじめているが、まだまだ普及しているとは言い難い。今後、実施する先進農家体験実習等を通して、導入実態等について詳しく学び、これからの農業界をけん引できる人材に成長したい。

(3) 将来の夢

これまでたくさんの人と出会い、たくさんのことを経験してきた。特に私をここまで成長させてくれた高校の先生方には、感謝してもしきれない。はっきり言って私は将来の夢が明確に決まっているわけではない。それは、畜産という職業が大好きだから！！

そのため、今先行している酪農に関わる仕事か、それとも畜産全体に関わる仕事か。可能性は無限大である。農大や畜産研究センターの先生方から指導を仰ぎ、畜産の魅力を世にもっと普及できるように、悔いのないような農大生活を送りたい。

【別記様式2】

令和3年度全国農業大学校等意見発表要旨

農業大学校名 熊本県立農業大学校 学科名 畜産学科 1年 氏名 後藤^{ごとう}仁嘉^{みひろ}

1 課題

「畜産で阿蘇を活力ある地域へ」

2 意見・提言

(1) 高齢化が進む地元農業の衰退していく現実に向かう

我が家は祖父母、両親、3兄弟の家族で米、野菜、畜産の複合経営を営んでいる。近所の肉用牛経営を営む高齢者から春先になると毎年、「うちの畑で牧草の作付けをしてほしい」との声が聞こえてくる。「うちも人手が足らん、今年は断ろうか」と答える父親。「あそこは、若いもんがおらん。うちがしてやらんと牛飼いをやめるしかなか」と、毎年、引き受けてしまう祖父。自ら機械に乗り、いつの日からか飼料作物収穫や牛舎の除糞など、家業を手助けするようになっていた私は、父に「引き受けるよ」と提言。いつしか父と祖父の困っている顔を見ることが少なくなってきた。

(2) 将来、実現したい2つの夢

私は、農大を卒業後、就農してあか牛飼育をメインに携わっていくことを決めているが、そこで是非達成したい2つの夢がある。その1番目はあか牛の拡大。熊本県のあか牛は衰退してきている。そこであか牛の持つヘルシーで、美味しい肉質をアピールすることで、あか牛が見直され、価格安定を図る。また若い生産者に温厚で病気に強く、成長が早いあか牛の飼いやすさを再認識してもらい、再び阿蘇を「あか牛の里」にしたい。まずは消費拡大から生産まで携わるあか牛拡大の仲間づくりも積極的に取り組む。

夢の2番目が耕作放棄地の活用。地域の人に依頼された耕作放棄地に牧草の作付け、収穫を祖父と行っており、その収穫した牧草を高齢化かつ小規模な畜産農家らに供給し、畜産農家減少に歯止めをかけようと頑張っている。農大卒業後は委託作業の拡大や休耕地等の借用または購入を行い、休耕地や耕作放棄地の減少を図りたい。今、私は様々な利用方法がある耕作放棄地は「宝の山」だと感じている。

(3) 夢実現のためには地域での「あか牛復活共同体」の構築

私は、夢実現のために、阿蘇地域で「あか牛復活共同体」を構築していきたい。阿蘇地域をあか牛繁殖肥育一貫農場の1共同体として、繁殖、放牧、肥育、自給飼料の各部門に分け、外部からの雇用も視野に入れ、また一部IoT技術を活用しつつ、省力化とコスト削減、多頭飼育を図り、販売拡大された際の十分なあか牛の供給力を備えていく。特に放牧に強いあか牛の特徴を生かしつつ、コスト削減のためにも放牧を意欲的に推進する。

(4) 人と牛で美しい環境を維持していくことこそが持続可能な農業

私は、世界農業遺産にも登録されている阿蘇地域で農業を営むことを誇りに思っている。進んで牧野の整備などを行い、昔ながらの牛の飼い方について再び振り返り、草原維持に手をかけていきたい。草原が維持され景観を保護し、美しくなった地元に来てもらうことで南阿蘇村も活気あふれる村になる。また、人と牛で美しい環境を維持していくことこそが持続可能な農業につながっていくと信じている。畜産で阿蘇を活力ある地域への実現のため、そして阿蘇五岳をバックに草地で草をはむ、たくさんのあか牛の姿を夢に見ながら、私は頑張っていく。

令和3年度全国農業大学校等意見発表要旨

農業大学校名 青森県営農大学校 学科名 果樹課程 1年 氏名 くらだて 倉 館 蓮

1 課題 生産者の経済性追求

2 意見・提言

(1) 世間からの農業に対するイメージの固執

「農業は儲かる仕事だ」、「やりがいのある仕事だ」という話をよく耳にする。その一方で、収量や作物の生育が環境に大きく左右されるということも同じく耳にする。

ここで問題となるのは、農業を知らない若い世代が中途半端に見聞きした情報が仇となっているのではないかという点だ。農業について学ぶ内容は、高齢化が進み衰退傾向で、今の若い世代がどう対応していくかが重要だといったことが大半で、その結果「古くさい」「誰かがやってくれる」といった考えを持ち、興味や関心を失っているように思う。

必要なのは農業の技術や経営の実態を事実に基づき偏見なく学ばせることではないだろうか。

(2) 無知な状態から農業を学ぶ

私は、高校三年から祖父母の農業を手伝うようになった。私は農業のことを全く知らないまま多くの偏見を持ってしまっていた。そこで得た経験と知識から今私が言えるのは、農業は地道な作業が多く、それら一つ一つに大切な意味があること、そしてたった一つの作物、品種であっても、その性質全てを把握し、学び、実践しなければならないということだ。品質の劣るものを生産しても経済性の向上には繋がらない。

(3) 学んで感じた農業の現状と課題

この経験から感じたのは、農業が衰退している原因は、高齢化社会といった農産業自体のレベルではなく、知識を学べる環境の少なさと、農業に興味を持ってもらえるようなキーアイテムが知られていないこと、そのため新規参入者が手を引いてしまっているということではないかと感じた。しかし、これらを解決するには、若い世代が農業に触れる機会を増やし、新規参入者がもっと簡単に作物を作れる環境を生み出すことが必要であり、決して容易なことではない。

(4) テクノロジーの恩恵

そんな中、ブドウの摘粒作業の簡単な方法はないか調べた時、山梨大学が開発した、人工知能にブドウの粒数を推定させるスマートグラスというアイテムが目にとまった。このスマートグラスは、摘粒作業の効率化や経済性の向上に大きく寄与するのではと期待されている。このようなアイテムが世間に認知されれば、農業の古くさい、難しいというイメージが少なくなるのではないだろうか。

また、私は黄色弱視でりんごの選果に苦勞することが多いが、例えば色の判別をしてくれる「弱視ゴーグル」というアイテムがあればおもしろいと思う。このように、障害などの身体的条件で作業が制限されてしまうような場合も、こういったアイテムが解決してくれるかもしれない。

(5) 農業を発展させ続けるには

今の農産業にこのような人工知能などを使ったクオリティの高いアイテムを取り入れていくことで、新規参入しやすい環境と、農業に先端技術を駆使しているという二つの強みで、解決策の第一歩になるのではないかと思う。私も将来このような新しいアイテムの開発に携わることができればと考えており、必要な知識や資格の取得を目標に日々研鑽し、次世代農業の担い手となれるよう広い視野を持って努めていきたいと考えている。